

エンドロール ノート

大切な人がひとりまたひとりと亡くなり、うずたかくつまれたノートや日誌、メールや手紙の束など、膨大な言葉が遺された。ながい時間、それらを読み、声にしつつ、書き写すことしかできなかった。文字の上にふるえる文字をつらねて、埋葬するかわりに墨をつもらせていった。

遺された文字を書き写すうちに、その人の目で世界を見つめ、見つめ返されるようになる。しかし、いくらなぞっても、声も言葉も世界も、ぴったりとはかさならない。それでも書き続けたのは、ずれの痛みを凝視して、愛するためかもしれない。ひき裂きたい衝動におそわれて揉みくちゃにしてしまった紙を、もう一度ひろげて伸ばしていった。

ひとりの人間が一生のあいだにつづる膨大な文字とは、はてしのない、たったひとすじの息ではないか。ふりむくと、空に消えたはずのささやきが、みちあふれ、さざなみを生み、ゆらめいていた。

2017.6 福田尚代

《エンドロール》2016-17 雁皮紙、墨